

昭和三十一年度

財團
法人

東洋文庫年報

東洋文庫

昭和三十一年度東洋文庫年報

目次

一	昭和三十一年度に於ける東洋文庫	一
二	組織	五
三	職員	九
四	事業	
1	刊行圖書	一三
2	講演會	一五
3	談話會	二〇
4	圖書閱覽	二五
5	圖書撮影	二八
五	研究活動	
1	機關研究	三〇
2	研究者養成	三〇
3	職員の研究業績	三一
六	圖書・定期刊行物寄贈・交換者名一覽	三五

附

1	東洋學術協會……………	四七
2	ハーヴァード・エンチン・グラント運営委員會……………	四九
3	近代中國研究委員會……………	五〇

一 昭和三十一年度に於ける東洋文庫

不幸な戦争を終えてすでに十年の歳月が流れ、我が東洋文庫も漸次復舊の路を辿ろうとしている。過去に於て諸先學の不撓の努力によつて我が國の東洋學に大いなる貢獻をなした文庫は、戦敗による經濟的打撃にも拘らず、その堅實な實績をここ數年來、國の内外から等しく評價され、多大な援助を得てその活動の新たな段階に入つて行つた。

昭和三十年、故羽田亨博士の御盡力により文部省から參百八拾五萬圓の補助金を受け、研究成果の刊行に大いなる便宜を得たのに引續き、三十一年度には更に參百萬圓の増額を得、研究成果の出版の外に圖書の充實及び研究者の養成等にも力を入れることが出来る様になつた。

東洋文庫はその使命の一つとして東洋學に關する業績を公刊して來た。戦後もこの事業を繼續して來たが、出版費の支出はその乏しい財源によつては容易に辦ずることが出来なかつた。その結果、重要な業績も久しく篋底に眠るものも少くなかつたのである。しかるに三十年度よりこれらの著作もようやく出版されることになり、三十一年度も、論叢として「明史食貨志譯註」二卷が、叢刊として「古鮮冊譜」第三冊が、又或いは歐文紀要 No. 16 が、公にされた。

従來、文庫は洋の東西に互つて東洋學關係の圖書の一大寶庫として、國內のみならず、海外にも廣く知られていたが、敗戦によつて財政困難のためこのコレクションの繼續は殆ど停頓の已む無き状態に陥つた。この間にあつて諸外國の東洋學機關並びに東洋學者との間に出版物の交換の契約を取り結び、主要な研究雜誌や圖書を多數集めることが

出來たのは専ら榎研究員の並々ならぬ努力によるものである。しかし各國の研究が漸次復活するに及び、その成果も逐次公にされるものが増加し、これらを購入する必要に迫られたが、それに對する財源殆ど無く、大いに困窮した。文部省はこの窮情を理解し、三十一年度に約二百萬圓を圖書充實の費用として計上することを承認し、これにより單行本は洋書一八四部二二九冊、漢籍二七四部六五〇冊、和書二四部三六冊、合計四八二部九一五冊、雜誌は歐文一七六部六六四冊、華文二一部四四冊、邦文八部一二三二冊、合計二〇五部一九四〇冊を購入し、その結果文庫は再び世界の東洋學の最新知識を利用者に提供することが出来るようになったのである。

文庫にはもと研究生の制度があり、少壯の研究者の養成に努めていた。當時の研究生で今日學界の重鎮となつてゐる人も少くない。由來東洋學に従事する人々は世間的には比較的恵まれないので、我が國の東洋學を堅實に進展させるためには斯學に志す若き世代を育成することが絶対に必要である。この事業も文部省の好意によつて承認され、三十一年度より研究者養成の費用が計上されることになり、三名の新進學徒を研究生として採用した。

なお、文庫の活動の一つとして春秋二期に開催していた公開講座「東洋學講座」も三十一年より再開し、世人の關心を高めた。

更に昭和二十八年以來、文庫を中心として設けられた敦煌文書整理研究委員會は文部省より前年度に引續き機關研究交付金の補助を受けてその整理に當つてゐるが、スタイン文書の自由な利用も近い將來に約束され、我が國の東洋學界に大きな寄與をなすことになるであらう。

國外からの援助としては前年度からの繼續としてハーヴァード・エンチン研究所とロックフェラー財團からの補助があつた。ハーヴァード・エンチン研究所の補助七、五〇〇弗は文庫の主な事業である出版と研究者養成に向けら

れ、文部省の援助と相俟つて文庫の再出發に重要な活力を與えている。その出版物としては滿文老檔Ⅱを印行した。三十一年四月、同研究所の新理事長ラインシャウアー氏は文庫に來訪、文庫當局者と懇談された。

ロックフェラー財團は文庫内に設けられた近代中國研究委員會に對し三十一年十一月より向う三年間二六、八六五弗を補助し、同委員會はこれにより着々成果を擧げているが、三十一年度には委員坂野正高氏を米國に派遣し、米國に於ける研究狀況、研究機關及び研究資料を視察させた。

これらの國內・國外の援助により東洋文庫は文字通り蘇生したといえる。文庫はこれによつてその傳統的な活動を再び開始することが出來たし、又新しい情勢に即應してその獨自の機能を見出して行くことも出来るようになったのである。ここに文部省當局、殊に常に勸告と指導を惜しまれなかつた大學學術局の岡野學術課長、渡邊課長補佐、大谷内事務官等の諸氏に深く感謝の意を表したい。又ハーヴァード・エンチン研究所のエリセイエフ博士及びラインシャウアー博士、並びにロックフェラー財團の方々にも厚く謝意を表する次第である。

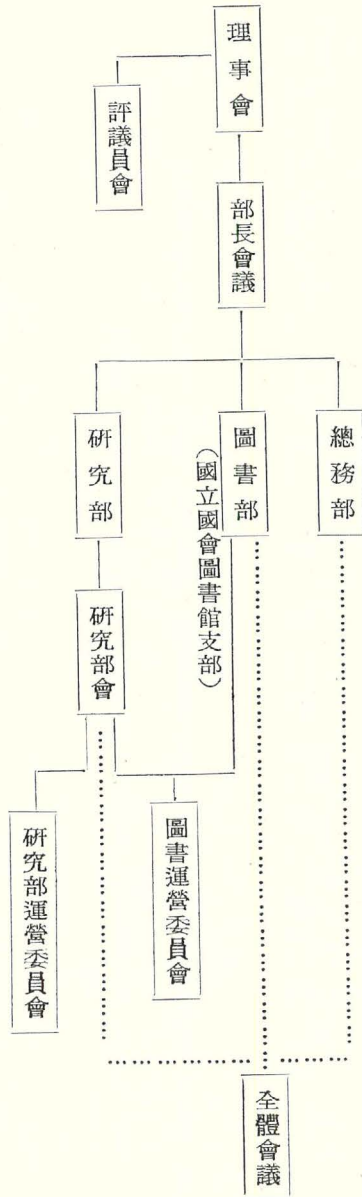
昭和三十一年度に於て人事の面に若干の動きがあつた。昭和三十年夏、インド政府の懇請によりニューデリー大學學院に招聘されてその建設に盡力した研究部長代理榎一雄氏はその大任を果して三十二年二月末歸朝、復任した。又前年度近代中國研究委員會から米國に派遣された市古宙三氏はその視察を終え、歐羅巴を経て三十年九月歸國した。

三十一年四月、戦後文庫の庶務・會計の主任であつた中尾方一氏は病氣のため辭任し、その代りに開國百年記念文化事業會の會計を擔當している大友長太郎氏が臨時に兼務として會計を主任することになつた。三十年六月病を得て療養中であつた、研究部事務擔當の松村潤氏は健康を恢復して、三十一年九月から復職した。その外、三十一年四月

に關係に金子良太氏、研究部事務囑託に吉村敬子嬢がそれぞれ新任された。かくて人的にもようやく整備されようとしている。

永らく研究員として又研究顧問として文庫の研究活動に貢獻された橋本増吉博士は昭和三十一年五月十九日に逝去された。又六月八日には嘗て和漢書目録を擔當された樋口慶千代氏が永眠された。兩氏の靈に對して深く哀悼の意を表する。

二 組 織



財団法人 東洋文庫 寄附行 爲

第一章 名 稱

第一條 本財団法人は財団法人東洋文庫と稱す

第二章 目的及事業

第二條 本財団法人は東洋に關する圖書を蒐集し東洋學の研究及其普及を圖るを目的とす

第三條 本財団法人は前條の目的を達する爲左の事業を行ふ

一 文庫の設置經營

二 研究部の設置經營

三 講演會講習會展覽會の開催

四 有益なる圖書の出版

五 其他評議員會の決裁に依り必要と認めたる事項

第三章 事務所

第四條 本財團法人は事務所を東京都文京區駒込上富士前町百四十七番地に置く

第四章 資産及會計

第五條 本財團法人の資産左の如し

一 基本財産

二 本財團法人設立者及有志の寄附金

三 圖書其の他の動産

四 第一號及第二號の財産より生ずる果實

五 雜收入

第六條 本財團法人の資産は評議員會の決議したる方法に依り理事長之を管理す

第七條 基本財産は之を處分するを得ず 但し財團法人の目的遂行上基本財産の處分を必要とするときは評議員

四分の三以上の同意を得且主務官廳の認可を受くることを要す

第八條 本財團法人の經費は第五條第二號第四號並に第五號の收入及前年度繰越金を以て之を支辨す

第九條 毎會計年度の終に於て剩餘金ある時は之を基本財産に編入す 但し一部に限り之を翌年度に繰越すことを得
第十條 本財團法人の豫算は毎年度評議員會の決議を経て之を定め決算は其の認定を経べきものとす

第十一條 本財團法人の會計年度は毎年四月一日に始まり翌年三月三十一日に終る

第五章 解 散

第十二條 本財團法人解散するに至りたる時は理事は豫め評議員會の決議を經且主務官廳の認可を得て剩餘財産を同様目的を有する官公立又は私立の團體に寄附して本財團法人の設立の目的を永遠に繼續せしむることを圖るべし

第六章 役 員

第十三條 本財團法人に理事五名以上七名以内監事二名以内及評議員若干名を置く

第十四條 理事及監事は評議員會に於て評議員中より之を五選す

第十五條 理事中に理事長一名を置き別に専務理事一名を置くことを得

理事長及専務理事は理事の互選に依る

理事長は本財團法人を代表し其事務を統轄し會議の議長となる

専務理事は理事長を補佐し本財團法人の事務を掌理し理事長故障ある時は其の職務を代理す

第十六條 理事及監事に缺員を生じたる時は評議員會を開き補缺選舉を行ふ 但し理事會に於て事務に支障なしと認むるときは延期することを得

第十七條 評議員は理事會の決議により之を推薦す

第十八條 役員は任期は四ヶ年とす 但し再任を妨げず 役員補缺者の任期は前任者の殘任期間とす 役員は任期満

了後と雖後任者就任する迄其の職務を行ふ

第七章 會 議

第十九條 理事會は理事長之を招集し理事三名以上の出席を以て成立し議事は其の過半数の同意に依りて決定す

第二十條 評議員會は理事長之を招集し毎年一回之を開く 但し理事に於て必要と認めたる時は臨時之を招集することを得 監事又は評議員の三分の一以上より會議の目的たる事項を示して請求をなしたる時は評議員會を開くことを要す

第二十一條 評議員會の取締權限左の如し

一 歳入歳出豫算を定むること

二 決算の認定に關すること

三 役員を選擧すること

四 本寄附行爲を變更すること

五 其他理事に於て必要と認め附議したる事項に就き審議すること

第二十二條 評議員會は評議員三分の一以上の出席を以て成立し議事は其の過半数の同意に依りて決す 可否同數なる時は議長之を決す 但し第二十一條の寄附行爲の變更に就きては評議員三分の二以上の出席を要す

第八章 附 則

第二十三條 本寄附行爲は理事會及評議員會の決議を経主務官廳の認可を得て之を變更することを得

三 職 員

理事 長 細川 護立 (文化財保護委員)

理 事 和 田 清 (日本學士院會員 東京大學名譽教授)

有 光 次郎 (元文部次官)

德 川 宗 敬 (元參議院議員)

小 倉 正 恆 (元大藏大臣)

澁 澤 敬 三 (元大藏大臣)

山 本 達 郎 (東京大學教授)

監 事 岡 東 浩 (東山農事常務取締役)

評 議 員 小 泉 信 三 (日本學士院會員 元慶應義塾大學總長)

新 村 出 (日本學士院會員 京都大學名譽教授)

磯 野 長 藏 (明治屋本店社長)

俣 野 健 輔 (飯野海運社長)

島 田 孝 一 (元早稻田大學總長)

潮 田 江 次 (元慶應義塾大學總長)

高 橋 龍 太 郎 (元通產大臣)

矢内原忠雄 (東京大學總長)

石黑俊夫 (三菱地所會社會頭)

梅原末治 (京都大學名譽教授)

總務部

大友長太郎

丸龜美貴子

圖書部 (部長)

岩井大慧

石黑彌致

田川孝三

森岡康

宇都木章

金子良太

研究部 (部長)

和田清

(顧問) 津田左右吉 (早稻田大學名譽教授)

原田淑人 (日本學士院會員)

岩井大慧

梅原末治

藤田亮作 (東京藝術大學教授)

辻 直四郎 (東京大學教授)

村 田 治 郎 (京都大學教授)

岩 村 忍 (京都大學教授)

山 本 達 郎

(研究員) 岩 生 成 一 (東京大學教授)

末 松 保 和 (學習院大學教授)

榎 一 雄 (東京大學教授)

河 野 六 郎 (東京教育大學助教授)

關 野 雄 (東京大學助教授)

三 根 谷 徹 (東京大學助教授)

山 根 幸 夫 (在ケムブリッジ大學)

本 田 實 信 (在ケムブリッジ大學)

田 中 正 俊 (橫濱市立大學助教授)

松 村 潤

(研究生) 山 口 瑞 鳳

斯 波 義 信

永 積 昭

(事務囑託) 高 畠
吉 村
敬 子 稔

四 事 業

1 刊 行 圖 書

○和田清編『明史食貨志譯註』 東洋文庫論叢第四十 昭和三十二年三月 A五版 一三三〇頁 索引五四頁 英文
要旨一八頁 地圖三葉

本書は、明史食貨志を假名交り文に書き下し、これに詳細な註釋を施したもので、初めに編者の序文があり、終りに原文および明代社會經濟史研究文獻目錄を附加している。本文の内容および執筆者は次の通りである。

食貨一 戸口

松本善海

田制 屯田・莊田

藤井宏

食貨二 賦役

山根幸夫

食貨三 漕運・倉庫

星 斌 夫

食貨四 鹽法

藤井宏

茶法

佐久間重男

食貨五 錢鈔・坑冶

百瀬弘

商稅・市舶・馬市

佐久間重男

食貨六

上供採造・採造・柴炭・珠池・織造・燒造・俸餉

中山八郎

なお、末尾の地圖三葉は、明代漕運圖（星）・明代行鹽區圖（藤井）および明代行政區劃圖（松本）である。

○前間恭作編『古鮮冊譜』第三冊 東洋文庫叢刊第十一 昭和三十三年三月 B五版 八二〇頁 圖版四二葉

本書は昭和十九年四月發刊の第一冊（ア〜コ）、昨三十一年三月發刊の第二冊（サ〜ソ）に續く最終冊（タ〜ツ）である。自家所藏本はもとより、諸種目錄あるいは實見にもとづき、廣く古今東西に互る公私所藏の朝鮮本を五十音順に排列して、著者名およびその略傳、序跋・版種・版地・丁數・版木所在・書誌學的解題などを記している。なお、卷末に末松保和「前間先生小傳」を附録す。

○滿文老檔研究會譯註『滿文老檔』Ⅱ（太祖2） 東洋文庫叢刊第十二 昭和三十一年八月 B五版 四八九頁 圖版二葉

第一冊に引續き、太祖の第三十二卷より第六十三卷まで、年代的にいつて天命七年（一六二二）正月より天命九年（一六二四）六月までが收められている。なお三十二年度に第三冊を刊行し、太祖の卷を完了する豫定である。

○東洋文庫歐文紀要 *Memoirs of the Research Department of the Toyo Bunko.*

No. 15. (1956)

Special number in memory of the late Prof. Dr. Kurakichi Shiratori

A Brief Account of Dr. Shiratori's Life and Works.

The List of Works.

Articles :

A Study on T'iao-chih 條支.

Chinese Ideas Reflected in the Ta-ch'in 大秦 Accounts.

The Geography of the Western Region Studied on the Basis of the Ta-ch'in Accounts.

A New Attempt at the Solution of the Fuilin 拂菻 Problem.

No. 16. (1957)

Kurakichi SHIRATORI 白鳥庫吉; On the Ts'ung-ling 葱嶺 Traffic Route Described by C. PROLE-

MAEUS.

Sei WADA 和田清; Some Problems Concerning the Rise of T'ai-tsu 太祖, the Founder of

Manchu Dynasty.

Kōdō TASAKA 田坂興道; An Aspect of Islam Culture Introduced into China.

Rokuro Kōno 河野六郎; On the 'Tense' System of Middle Korean Verbs.

2 講演會

東洋學講座

春 期

第九十六回 昭和三十一年六月二十六日

「中國における中國史研究の現状——主として均田・租庸について——」 中央大學教授 鈴木 木 俊

最近は中國の歴史關係の出版物も多くはいつてくるようになったが、私はそのすべてを見ている譯でもなく、また中國が性格を異にする中共と臺灣とに分かれている關係上、この兩者の歴史學界の現状をまとめて述べるなどということは、私には至つて不向きな仕事といわざるをえない。ただ私が特に氣づいただけについては、出版關係では中共・臺灣ともに、歴史研究の基本的な材料となる古典の複製や名著の再版につとめ、特に中共では太平天國などの近代の史料集の刊行が大に行われていることであり、また研究の面では、臺灣には従來とあまり變つた傾向が認められないが、中共では、中共的な立場で、過去の事實に再檢討を加え、新しい歴史を作ろうとする意欲が強く見えていることである。しかし、この中共の研究の多くには、考證が粗雑で未熟であり、殊に文章が悪くなつてのが目立つている。考證の不十分な點では、一九五四年の歴史研究（第四期）の鄧廣銘氏の意見、翌年の同誌（第五期）所載の岑仲勉・韓國馨・胡如雷三氏の反對論を擧げることができる。これは鄧氏が唐の均田制と租庸調制とは關係なしとし、三氏がそれに反對したものである。結論的には、私は岑氏等三氏の説に賛成であるが、兩者ともに研究の過程に誤りがあり、考證の不十分を暴露している（これについては、拙稿「唐令の上から見た均田租庸調制の關係について」中央大學文學部紀要、史學科第二號參看）。

第九十七回 六月二十七日

「歐米における東洋學研究の現状」

東京大學教授 山 本 達 郎

日本に於ては明治の中葉以來所謂東洋學が勃興したが、時期によつて諸外國の研究に對する關心に大きな變化がみられる。概していうと、初期に於ては歐米の研究に對して頗る注意を拂つていたが、日本に於ける研究が發展するにつれて、歐米の著作物を消化しようという努力が薄れて來た傾向がある。諸外國の研究には、日本とは異つた多くの特色ある業績がみられるのであるから、常にこれに注目していなければならぬわけで、日本の研究が孤立して獨善的なものにならないように努力する必要がある。厚みのある歐米の東洋學の傳統は今も盛んに續いており、例えば以前から活動していたスエーデンのカール・グレン教授、フランスのセデス教授の如き、戦後も續々として重要な業績を發表している。併し何といつても第二次世界大戰を境として歐米の東洋學は著しく變化した。ペリオ・マスペロ其他の諸大家が相次いで歿したといふばかりではなくて、研究の傾向が變つて來たのである。従來の學者は一人一人が孤立して研究を行つていたが、近年は協同・協力の傾向が現れている。ヨーロッパ各國のシナ學者を中心に毎年「青年シナ學者會議」が開催されてアジア、アメリカからも參加者があり、この會議を中心として各國の學者の協力による宋代史研究提要の編纂が進みつつあるのも、この新しい動きの一つである。以前には東洋學といえば古い時代を扱つたものが多かつたけれども、最近では現代を取扱う學者が少なくない。ことにアメリカではこの傾向が強し、歴史的な研究と諸種の社會科學との結び付きも問題となつてゐる。西洋で東洋といへば、會てはギリシヤ・ローマに先行する古代東方が關心を引き、いわば地球を東廻りの方向で東洋をみる傾向が強かつたが、この頃ではアメリカから太平洋を越えて東アジアをみるといふ、いわば西廻りの方向をとる東洋研究がみられる。第二次世界大戰以後の東洋諸民族の獨立と新しい發展は、世界の東洋に對する關心を一變せしめ、所謂東洋學にも大きな變動を起しつつある。

秋 期

第九十八回 十月二十三日 三十日

「朱印船貿易に關する諸問題」

東京大學教授 岩 生 成 一

江戸幕府の航海特許狀を携えた朱印船貿易について從來多くの研究が出ている。しかし何れも當時の諸情勢から漠然と判斷して、貿易は盛んでその利潤も大であつたと説くだけで、その具體的な實情は明かでない。そこで廣く内外の未刊の史料により研究した所によれば、一六〇〇年より一六三五年の渡航禁止の年まで、少くとも延數三六〇餘隻が東南アジア十九地に渡航し、船は大は八〇〇噸より小は一〇〇噸で、平均三〇〇噸位であり、建造費は一〇噸當り銀一貫目（一〇〇兩）位であつた。始めは和船であつたが、後には西洋式造船術も採用され、日本人の外、支那人や英、蘭、葡、西人が尠からず僱われ、日本人も歐式航海術を傳習熟達する様になつた。貿易家も、百二三十名あつたが、その中大名一〇名、武士四、他の數十人は京、阪、堺、長崎など主要商業都市の富商であつた。此の外、在留支那人、西洋人も夫々十餘名あつた。一船の積載資本は主として銀貨で、大は一五〇〇貫より小は一〇〇貫で平均五〇〇貫位であつた。此等の資銀は貿易家自身の出資の外、船長、船員、便乗商人の銀も多く、貿易は各階層共同にて熱心に遂行された。朱印船は渡航先で、移住日本人の協力を得て、巧に商機をつかんで貿易を遂げ、一時歐洲商人を壓した。その主要輸入品生糸、絹織物、鹿皮、蘇木、砂糖などを常に大量に買付け、その數量は常に蘭支船のそれを遙に凌駕し、少くとも諸經費を差引ても十割内外の利潤をあげた。そして朱印船の年間總貿易額は、その殷盛時に在つては、遙に蘭船を凌駕し、支那船よりも多く、葡船と伯仲の間にあつた。そこで貿易の決済に當時の日本から諸國船に依つて輸出充當された銀は、十萬乃至十五萬キログラムに達し、全世界銀生産額の三分の一乃至四分の一の巨額

に上つたことが推察される。

第九十九回 十一月十七日 十四日 二十一日

「インド古代史上の二三の問題」

東京大学教授 三 上 次 男

獨立後、インドの考古學界では、自國の古代の歴史や社會狀態を復原するため、重要な問題を取りあげ、計畫的に調査を行つてゐるが、この數年、特に成果が注目されているものに彩文灰色土器 (Painted Grey Ware) 文化の問題がある。周知のように、南アジア最古の文明はハラッパ文化人 (Harappan) の手によつて起されたが(いわゆるインダス文明)、この文化が前千五百年前後に衰滅すると、それに代つてアーリア人が、同じ地域で活躍をはじめた。しかし最近まで、初期のアーリア人の文化の性質や生活の狀態は、考古學的には全く不明で、わずかに前七・六世紀以降の狀態が解るにすぎなかつた。しかるに數年來、Rupar Hastinapura Purana Qila (New Delhi) などから、ハラッパ文化と前六世紀前後のアーリア文化との中間の時代をうづめるものとして彩文灰色土器遺跡が発見され、その數は年々増しつゝある。そうして新たに發見された彩文灰色土器文化の示すところは、ヴェーダやマハバーラタ等古代文獻によつて物語られてゐる古代の狀態と一致するところが多い。

「南アジアにおける遺跡調査の狀態」

西暦紀元前後から三・四世紀にかけてのインドとローマの貿易關係を傳える代表的な遺跡は南インドの Arikamedu である。一九四五年におけるこの遺跡の調査によつて、ローマ人のインドにおける活動狀態は、いちじるしく解るようになった。なおインド (パーキスタンとセイロンを含む) におけるローマ貨幣の發見は從來八〇カ所近くにおよん

でいたが、一九五五年度において、さらに Nevasa と Vadnagar の二カ所が加わつた。

アメリカメドウからは、中國の宋元時代の青磁・青白磁・白磁類が発見されているが、この種の陶器は、ここばかりでなくマイソール州の Chandravalli シンドの Brahminad その他、またセイロンの Dādigama や Yapahuva などから発見され、中世におけるインドと中國の貿易關係を物語っている。宋元時代の中國陶器はさらに西方のアフリカ東岸のソマリランドやケニヤ、アラビヤの西海岸、イランのホルムズやレイ、イラクのサマッラ、エジプトのフオスタートなどからも発見されている。

「西アジアにおける諸遺跡の現状」

西アジア方面の考古學上の發掘調査の現状をアフガニスタン・イラン・イラク・シリア・レバノン・トルコの各國別に述べた。

3 談話會

昭和三十一年四月二十一日 「ヴェトナム語に關する二三の問題」

三根谷 徹

ヴェトナム語の南方方言（サイゴン方言）の音韻的特徴を北方方言と對稱して述べたが、とりわけ、音節末の二重調音子音について次の事實を取上げた。

ヴェトナム語の音節末子音には、圓唇母音のあとで〔-m〕〔-p〕という二重調音子音が現れる。北方方言においては、これらの音がそれぞれ、〔-m〕〔-p〕と相補う分布をなす allophones と認められるが、南方方言においては

圓唇母音のあとで〔-m〕〔-n〕〔-p〕〔-t〕が何れも現れ、音韻論的に〔-m〕〔-n〕〔-p〕〔-t〕の對立が認められる。この南部方言の圓唇母音のあとの〔-m〕〔-n〕はそれぞれ北部方言の〔-m〕〔-n〕に對應するものである。

昭和三十一年五月十九日 「十七世紀前半のオランダ東インド經營に關する一考察」 永 積 昭

一六〇四年にオランダ東インド會社はシャムとの貿易關係を開いた後、次第に他の西歐諸國を壓倒し、一六七〇年までにシャム貿易を殆んど獨占するに至つた。その契機となつたのは、マレー半島東岸の小國パタニに對するシャムの一六三四年の遠征であつた。

オランダがシャム貿易の獨占を確立した原因は、①當時シャム王室が内外の事情でオランダとの提携を餘儀なくされ、その結果他の國はオランダと競争し難くなつたことである。シャムとパタニとの衝突は、その支持國たるオランダとポルトガルの抗争を意味し、パタニの降服はポルトガルの敗北に他ならなかつた。②オランダのシャム貿易の重要な商品は鹿皮であり、オランダはこれを日本に輸入したが、日本の鎖國によつてオランダが鹿皮貿易の巨利を獨占したことである。

昭和三十一年六月十六日 「戰國楚の世族について」 宇 都 木 章

戰國時代は從來の大世族の變質・崩壞の過程の時期といわれている。

然しながら、新興してきた士階級に對抗し、常にその活動に重壓を加えた世族の勢力がなお強大なものであつたという事は無視され得ない。例えば戰國楚の世族はその尤も好い例であろう。彼等の地盤の一つは淮北・江東に存し、

宗族的結合を維持し、大土地所有者であつたらしい。地の齊に接していた關係から彼等の齊に對抗する意識が甚だ強く、そのため對秦政策まで失敗するに至つたと思われる。然し楚國の非常時に對處して、彼等の團結が常に固く根強くあつたことはその世族的性格の故であつた。

昭和三十一年七月二十一日 「二十世紀初頭におけるインドの民族運動」 高 島 稔

ベンガル分割令 (Bengal Partition Act) に對する抵抗を契機として昂揚した、今世紀初頭におけるインドの民族運動は、民族ブルジョアジーと知識人上層部、及び下層郷紳 Bhatralok と知識人中下層部の二つを主な勢力として展開された。一般に前者は温和派 (Moderates)、後者は過激派 (Extremists) として知られるが、一九〇六年の國民會議派大會における、分割反對・スワラジ・スワデシ・民族教育の四大決議は、兩派の要求の最大公約數的表現であり、背後には解決さるべき深刻な社會的經濟的問題を持つものであつた。

昭和三十一年九月二十二日 「南宋米市場の分析」 斯 波 義 信

中國本土の經濟的基盤は、唐の中期以後江南へ移り、後の “Key Economic Area” の基礎は南宋時代に略々確立した。これに伴う國內及び國外に亙る商業的繁榮を、當時の中國の全經濟秩序の裡に正當に定位せしめ、更に中國商業の特質を歴史的觀點から究明する事が當面の問題となる。ここでは其の手掛りとして、中國の主要農産物の一つであり、其の流通機構の複雑な米を採り上げて分析を試みた。

南宋に於ける米市場の分析の結果、(一)官僚や軍隊のための官米の採辦——和糶——が米市場の大勢を左右したであ

ろう事。(㉑)米の流通は廣汎活潑であつた事。(㉒)生産の地域的偏差が著しく、(a)生産地と消費地との間の密接な關係を生じた事、(b)米産に乏しい地方の農民の商業的作物の栽培や、地方的に專業化された手工業製品による生計維持、(c)市場關係の複雑不均衡な事。(㉓)米の流通過程に、步擔、米主、米船、米牙人、米鋪、などの特殊な商人の介在する事、などの諸點を指摘出來た。

昭和三十一年十月二十日 「初期サキャ派史」

金子良太

十一世紀後半から十二世紀半ばまでに、西藏佛教は大別して、教誠派・教系派・薩迦派の三主流教團の創立をみた。當初、薩迦派はその擁した僧數において、遙かに教系派系諸派には及ばなかつたが、十三世紀に至り薩迦寺坐牀喇嘛が、元室より西方佛教の統轄者に任命されるに及んで、他派を壓倒して西藏全土の政教兩權を把握した。

昭和三十一年十一月十七日 「明末清初の江南農村手工業について」

田中正俊

最近、中國においては、所謂「資本主義の萌芽」を扱つた多くの研究論文が發表されている。これらの諸研究には、一般經濟現象の漠然たる評價によつて、また經營形態の外觀的考察によつて、「資本主義の萌芽」の現象を、時代を遡らせて、極めて安易に認める傾向が見られる。このような中國における研究を批判する素材として、ここでは、十六・七世紀以降の揚子江デルタ地帯における製絲・絹織物業をとりあげ、そこに存在する、資本主義の自生にとつて阻止的な諸條件を擧示するとともに、一見阻止的條件をなすかに見えるこれらの諸事實そのものうちに主體的發展の契機を究明することによつてのみ、アジア社會における近代적進化的法則性を理論化し得るのではないかという問題提起をおこなつた。

昭和三十一年十二月十五日 「明代哈密王家の起原」

松村 潤

明史西域傳において、哈密里傳と哈密衛傳とは、別々の王家の歴史を記述したものであるが、實はこの哈密里と哈密とは同一地で、コムルなる國の名を寫したものである。そしてこの哈密里傳は、明實錄に從つて洪武年間のコムルの歴史を記録しているのであるから、永樂年間以後の歴史を扱つてゐる哈密衛傳の前におかれるべきものである。

哈密衛傳に出てくる、明代哈密王家の始祖ともいえるコムルの王、納忽里なる名前は、明實錄に散見するところの、北元の元主脫古思帖木兒麾下に強大な勢力を有していた大酋、兀納失里の誤寫に他ならない。この兀納失里と、元史諸王表に記されている威武西寧王、幽王、肅王との間に何らかの關係があるということは、すでにポール・ペリオ博士の指摘されたところであるが、私は、元史の編年の記述を調べ、大モンゴル帝國時代のタングート地方のモンゴル封建王侯の系譜をたどることによつて、元代の終りから、明代の初めにかけてのコムルの事情を述べてみた。

昭和三十二年一月十九日 「チベット語接續辭 te について」

山口 瑞 鳳

チベット語接續辭 *te, ste, de* は、今日では連聲法則に關して區別があるばかりで用法上の區別はない。しかしながら、古典チベット語についてこれらの接續辭の分類をすすめてみると、二つの全く異つた用法が認められる。一つは、二つの文又は述語の間に時間的な前後關係が示される場合であり、他はそのような關係を含まないものである。

「言語の門」(Smra-bahi sgo) には、「具餘」(thag-ma bcas) が指示代名詞の特殊な用法でないかと思わせ

る記述がある。つまり、代名詞 σ が連聲なしに接續の働きの示しえたことを述べているようである。尤も、それは、二文又は二つの述語の間に時間的な前後がない場合に限つて用いられたであろう。他方、接續辭 $\sigma\sigma$ は元來が上述の用法に従つた指示代名詞 σ と過去の時を示す特殊な $\sigma\sigma$ との連合によつて生じたものであろう。

結局、 $\sigma\sigma$ は σ に由來して音聲の調和を原因として成立したとするこれまでの見解とは異り、 $\sigma\sigma$ (又は $\sigma\sigma$) と σ は元來異つた形態をもつて區別のある用法を擔當していたが、次第に混同され、遂に一方が他方の異態と見做されるに至つたと考えられるのである。

昭和三十二年二月十六日 「克殷前の周の青銅器」

關野 雄

殷と周の銅器の別については、古くから多くの人たちによつてさまざまの説が立てられている。しかし、この場合の周は、いつも西周という意味であつて、武王が帝紂をたおす前の周、つまり克殷前の周のことは問題にしていない。ここに一つの盲點がある。考えてみると、優秀な青銅兵器で武装された殷を一擧に滅ぼした周は、もちろん青銅兵器を持つていたはずである。また、克殷後あれほどさかんに銅器を造つた周が、それより前に銅器を用いていなかつたとは思われない。これらのいわば「前周式」とも稱すべき青銅利器や銅器は、はたしてどのような形式を具えていたであろうか。殷のとは全く系統の違うものであつたか。あるいは、初め同一起原であつたものが、のちに二つに分れたのか。この間の事情を、近ごろ發見された新しい資料により、いろいろの角度から究明してみた。

圖書閱覽の事務は、現在のところ國立國會圖書館支部東洋文庫が管掌しており、昭和三十一年四月以降、三十二年三月に至る閱覽概況は左の通りである。

開館日數 二九七日

閱覽者數 三、五〇二人

閱覽圖書數 六六、六六八冊

なお、國立國會圖書館支部東洋文庫の圖書閱覽規則は左記の如くである。

國立國會圖書館支部東洋文庫圖書閱覽規則

(圖書の閱覽のできる者)

第一條 國會議員、及び東洋學を研究しようとする者で國立國會圖書館長又は東洋文庫長が適當と認めた者は、この文庫の圖書その他の圖書館資料(以下圖書という)を閱覽することができる。

(閱覽時間)

第二條 圖書の閱覽時間は、午前八時四十分から午後四時三十分までとする。

(閱覽を行わない日)

第三條 この文庫は、次の各號の場合には閱覽業務を行わない。

- 一 日曜日及び祝日
- 二 木曜日の午後

三 國立國會圖書館長が臨時に必要と認めた場合

(閲覧料)

第四條 圖書の閲覧は無料とする。

(閲覧手續)

第五條 圖書を借り受けるには、申込票に所定の事項を記入して文庫に提出し、圖書閲覧票の交付を受けなければならない。

第六條 閲覧者は、文庫職員の指示に従い、所定の閲覧室において閲覧しなければならない。

(施設等の參觀)

第七條 この文庫の施設または圖書の參觀を希望する者は、文庫長の許可を受けなければならない。

(庫外貸出)

第八條 この文庫の圖書は、庫外貸出を行わない。

(利用の制限)

第九條 1 この文庫の規則又は指示に従わない者若しくはその他の不都合の行爲をした者に對しては、文庫の利用を停止又は禁止することがある。

2 他人に迷惑を及ぼすおそれがある者に對しては、入庫を拒否する。

(亡失、毀損等の處置)

第十條 圖書を亡失又は毀損した者は、指定の圖書を代納するか、又は相當の代價を辨償しなければならない。閲覧

票の紛失によつて生じた損害についてもまた同様とする。

附 則

この規則は公示の日から施行する。

5 圖 書 撮 影

昭和三十一年度に、研究者の需めに應じて撮影した圖書・資料は、チベット文大方廣如來藏經ほか七四件にのほつた。

東洋文庫所藏圖書寫眞撮影交附規定（暫定）

- 一、文庫所藏圖書の寫眞撮影交附の願出があつた場合は、原則として文庫當事者がこれを撮影し、その焼付印畫紙あるいはポジフィルムを交附する。
- 二、希望者が自ら撮影することを願ひ出た場合は、それが普通圖書の一部撮影である場合に限り、許可することがある。但し、撮影の場所は文庫に於て指定する。
- 三、希望者が普通圖書の一部撮影を文庫側に依頼した場合、希望あれば、そのネガフィルムあるいは原板の交附・貸與を認める。
- 四、貴重圖書あるいはこれに準ずるものは、すべて文庫當事者がこれを撮影する。依頼者が自ら撮影することは出来ない。
- 五、希望者は圖書撮影許可願の用紙に必要な事項を記載して提出し、文庫の許可を得なければならない。

〔注意〕 普通圖書を一巻・一冊またはそれ以上まとめて撮影する場合は、希望者が自ら撮影することは出来ず、必ず文庫當事者が撮影する。その場合、原則として焼付印畫紙あるいはポジフィルムのみを交附し、ネガフィルムあるいは原板は文庫に保管する。

寫眞撮影料金

一、撮影料

普通圖書 一齣（フィルム） 一五〇圓

重要圖書 〃 〃 二五圓

特別圖書（國寶） 〃 〃 五〇圓

カットフィルム（キャビネ、密着一枚附） 一枚 四〇〇圓

二、印畫紙焼付

CH A 5 一枚 三〇圓

A 4 〃 〃 六五圓

A 3（袋綴製本の場合） 〃 〃 一五〇圓

A 3 〃 〃 一四〇圓

キャビネ 〃 〃 二〇圓

有光紙 半切（密着を含む） 一枚 四五〇圓

〔注意〕 以上の価格は、時價によつて變更することがある。

五 研究活動

1 機關研究

「大英博物館、A・スタイン卿蒐集敦煌文書のマイクロ・フィルム撮影並にその整理研究」

研究擔當者 岩井大慧

研究協力者 江上波夫（東洋文化研究所） 榎一雄 貝塚茂樹（人文科學研究所） 辻直四郎（東京大學） 那波利貞

（京都大學） 羽田野伯猷（東北大學） 干潟龍祥（九州大學） 吉川幸次郎（京都大學） 山本達郎

本研究は昭和二十八年以來、文部省科學研究費交附金を受けて行われているものである。昭和二十八年、當時滞英中であつた榎一雄研究員の監督下に撮影・整理した大英博物館所藏スタイン博士蒐集敦煌文書のマイクロ・フィルム（ネガ・プリント）二二〇リールは昭和三十年末、文庫に到着し、そのペーパー・プリント化に著手した。かくして製册して一一九卷、八〇九冊、印畫紙數にして約九八、〇〇〇枚の一セットが完成したので、三十一年度には、六月より翌三十二年三月に互つて別に一セットを作製し、三月末、京都大學人文科學研究所にこれを寄贈した。

2 研究者養成

從來、わが國においては、東南アジア、インド、イスラムおよび中央アジアなどに關する研究は、その重要性にもかかわらず、甚だ不十分であつた。ことに、この方面の研究には特殊な言語を修得する必要があり、また研究資料の

整備からはじめなければならぬのであつて、これらの研究には、今なお未開拓の分野が多い。このような研究を擔當し得る研究機關として、わが國においてはかなり資料を整備している東洋文庫では、このような現狀に鑑み、昭和三十一年度より文部省の補助を得て、この方面の研究者の養成を主とする研究生制度を復活した。現在の研究生およびその研究題目は左の通りである。

「宋代經濟史の研究」

斯波義信

「近世東南アジア貿易史の研究——オランダ東印度會社の活動を中心として——」永積昭
「インド土地制度史の研究——イギリス統治下における——」高島稔

3 職員の研究業績

和田 清

『明史食貨志譯註』（東洋文庫、昭和三十二年三月） 編著

岩 生 成一

「異國渡海朱印狀の法的効力について」（『社會經濟史學』二二卷三號）

「占城國末期の國都と貿易港について」（『東洋學報』三九卷二號）

末 松 保和

「高麗兵馬使考」（『東洋學報』三九卷一號）

「朝鮮史（古代より高麗まで）」（『東アジア史』、山川出版社、昭和三十一年十一月）

「古事記崩年干支考」(『古事記大成』第四卷、平凡社、昭和三十一年十二月)

山本達郎

「敦煌發見戸制田制關係文書十五種」(『東洋文化研究所紀要』第十冊)

榎一雄

「ソグディアナと匈奴」(『史學雜誌』六四篇六、七、八號)

「魏書粟特國傳と匈奴・フン同族問題」(『東洋學報』三七卷四號)

「インド通信」(『世界史の研究』八號)

“Sogdiana and the Hsiung-nu”, *Central Asiatic Journal*, Vol. 1, No. 1 (1955).

“The Origin of the White Huns or Hephthalites”, *East and West*, VI, 3 (1955).

“Japan in World History”, *India Quarterly*, XII, 4 (1956).

“Japanese Buddhism”, *Radio India*, May 7, 1956.

河野六郎

“On the ‘Tense’ System of Middle Korean Verbs”, *Memoirs of the Research Department of the*

Toyo Bunko, No. 16, 1957.

關野雄

『中國考古學研究』(東京大學出版會、昭和三十一年七月)

「中國古代の金屬文化」(『歴史教育』五卷三號)

"On the Black and the Grey Pottery of Ancient China", *Proceedings of the Fourth Far-Eastern Prehistory and the Anthropology Division of the Eighth Pacific Science Congress, Combined Papers*, No. 6, Philippines Univ., 1956.

三根谷 徹

「中古漢語の韻母の體系——切韻の性格——」（「言語研究」三一號）

山根 幸夫

『明史食貨志譯註』賦役（東洋文庫、昭和三十二年三月）

「明初の均工夫について」（「東洋學報」三九卷三號）

本田 實信

"Post-War Japanese Research on the Far East", *Asia Major*, N. S., Vol. IV, Part 1 (1954).

"A Survey of Japanese Contributions to Manchurian Studies", *Asia Major*, N. S., Vol. V, Part 1 (1955).

N. E. B. Ceardel 氏と共同執筆

松村 潤

『滿文老檔』Ⅱ（東洋文庫、昭和三十一年八月） 滿文老檔研究會の一員として、神田信夫・岡本敬二・石橋秀雄・岡田英

弘の諸氏と共同執筆

「明代哈密王家の起原」（「東洋學報」三九卷四號）

山口 瑞鳳

「チベット語接續辭 *མེ* について」(「東洋學報」三九卷四號)

斯 波 義 信

「南宋米市場の分析」(「東洋學報」三九卷三號)

永 積 昭

「オランダの東インド經營初期に於けるシャム貿易の役割」(「東洋學報」三九卷二號)

六 圖書・定期刊行物寄贈・交換者名一覽

國內

愛知大學國際問題研究所

朝日放送株式會社

岩手史學會

大藏省昭和財政史編集室

大阪學藝大學

大阪大學文學部

大谷大學大谷學會

大塚史學會

岡山大學附屬圖書館

小川 博 氏

柿 花 勳 氏

鹿兒島大學文理學部

鎌倉市史編纂委員會

青山學院大學經濟學會

茨城大學文理學部

岩手大學學藝學部

大倉山文化科學研究所

大阪市立大學文學會

大阪歷史學會

大谷大學史學會

岡山史學會

岡山大學法文學部

開國百年記念文化事業會

鹿兒島大學史學地理學教室

金澤大學法文學部

關西大學文學會

關西大學歷史學會

九州史學會

京都大學人文科學研究所

京都大學文學部考古學研究室

基督教史學會

熊本大學熊本史學會

吳市役所

現代中國學會

神戸市立外國語大學研究所

國學院大學

國立國語研究所

駒澤大學

駒澤大學曹洞宗學研究所

酒井紫朗氏

史學會

資源科學研究所

白百合短期大學

學術文獻普及會

京都女子大學史學會

京都大學文學部

京都大學文學部中國語學中國文學研究室

宮內廳書陵部

熊本大學法文學會

慶應義塾圖書館

甲南大學文學會

神戸大學文學會

國立國會圖書館

古代學協會

駒澤大學史學會

西京大學

酒井眞典氏

史學研究會

白川靜氏

上智大學

靜嘉堂文庫

只野 淳氏

中央大學文學部

帝塚山學院短期大學

天理大學人文學會

東京學藝大學

東京教育大學國語國文學會

東京女子大學歷史研究室

東京大學史料編纂所

東京大學文學部

東京都立大學人文學會

東方古代研究會

東北大學文學會

東洋音樂學會

東洋學術協會

東洋大學學術研究會

內閣文庫

高羽 五郎氏

大東急記念文庫

朝鮮學會

天理大學出版部

天理圖書館

東京教育大學教育學部

東京國立博物館

東京大學教養學部人文科學科

東京大學東洋文化研究所

東京天文臺

東方學會

東北史學會

東北大學文學部

東洋學會

東洋史研究會

同志社大學法學會

中田 薰氏

中谷英雄氏

名古屋大學教養學部

西谷彌兵衛氏

日本學士院日本科學史刊行會

日本考古學會

日本新聞學會

日本大學教養部

日本民族學協會

農林省農業總合研究所

一橋大學一橋學會

廣島大學文學部廣島史學研究會

福岡商科大學研究所

藤井尙久氏

古川義三氏

佛敎文化研究所(智恩院)

平凡社

法學協會

名古屋市教育委員會

名古屋大學文學部

日本印度學佛敎學會

日本言語學會

日本宗敎學會

日本人類學會

日本大學藝術學會

日本歷史地理學會

ハーパー・燕京・同志社東方文化講座委員會

平岡武夫氏

美術研究所

福岡大學研究所

富士短期大學大世學院政治經濟研究會

佛敎史學會

文化史學會

米國大使館文化交流局

法政大學史學會

北海道學藝大學函館人文學會

北海道大學文學部

松田壽男氏

三木產業株式會社

明治大學史學地理學會

山路廣明氏

山梨大學學藝學部

山本智教氏

橫濱市總務局

吉岡義豐氏

立正大學史學會

立命館大學人文科學研究所

歷史學研究會

早稻田大學東洋文學會

渡邊鏡藏氏

北海道大學

前野貞男氏

滿州同胞援護會

三田史學會

山口大學文學會

山田憲太郎氏

山根達治氏

橫濱市教育委員會

橫濱市立大學

立教大學史學研究室

立正大學文學部

龍谷大學龍谷學會

早稻田大學研學會

早稻田大學圖書館

The Japan Writers Society

Keiō Institute of Philological Studies

Maison Franco-Japonaise
Monumenta Nipponica
Monumenta Serica
日華文化研究所

國外

BULGARIA

Bulgaria

Bulgaria Today, La Bulgarie d'Aujourd'hui

BURMA

Burma Research Society

CEYLON

National Museums

CHINA

廈門大學

National Library of Peking (北京圖書館)

DENMARK

The Carlsberg Foundation

Det Kongelige Danske Videnskaberne Selskab

Royal Library

ENGLAND

Asia Major

Bodleian Library

Cambridge University Library

India Office Library

Royal Anthropological Institute

Royal Asiatic Society

Royal Geographical Society

School of Oriental and African Studies

Prof. V. Minorsky

Prof. E. G. Pulleyblank

FINLAND

Finn-Ugric Society

Prof. Dr. Andrej Ruddiev

FORMOSA

Academia Sinica, Institute of History and Philology (中央研究院歷史語言研究所)

Association for the Advancement of Taiwan Culture (臺灣省文化協進會)

China Cultural Publishing Foundation (中華文化出版事業委員會)

Chinese Embassy in Japan

National Central Library (國立中央圖書館)

National Taiwan University (國立台灣大學)

The Tsing Hua Journal Publication Committee (清華學報社)

許聞淵氏

FRANCE

Bibliothèque Nationale

Collège de France

Musée Guimet

La Revue Historique

Société Asiatique de Paris

French Embassy in Tokyo

Prof. Dr. Henri Maspero

GERMANY

Akademie der Wissenschaften und der Literatur

Deutsche Forschungsgemeinschaft

Deutsche Morgenländische Gesellschaft

Gesellschaft für Natur- und Völkerkunde Ostasiens

Institut zur Erforschung der UdSSR

Universität Bonn

Universität Göttingen, Sinologisches Seminar

Universität Hamburg, Seminar für chinesische Sprach und Kultur

Prof. Dr. Herbert Franke

Dozent Dr. Otto Karow

Prof. Von Günther Wenck

HOLLAND

Instituut Kern

Koninklijk Instituut voor de Tropen

Rijksuniversitette, Leiden

T'oung Pao

HONG KONG

The New Asia Research Institute (新亞研究所)

HUNGARY

Museum of Eastern Asiatic Arts

INDIA

Deccan College Postgraduate & Research Institute

Principal Government Sanskrit College

The Ramakrishna Mission Institute of Culture

Visva-Bharati

ITALY

Istituto Italiano per il Medio, ed Estremo Oriente

Italian Embassy in Tokyo

KOREA

延禧大學

The Korean Economic Association

Seoul National University

李丙燾氏

PAKISTAN

Al-Islam

SIAM

The Siam Society

SINGAPORE

Malayan Branch of the Royal Asiatic Society

SOUTH VIETNAM

École Française d'Extrême-Orient

France-Asie

Société des Études Indochinoises

SWEDEN

Kungl. Biblioteket

The Museum of Far Eastern Antiquities

Universitetsbiblioteket, Uppsala

U. S. A.

American Oriental Society

Asia Foundation

University of California
Columbia University
The Far Eastern Association
Harvard-Yenching Institute
University of Illinois
Library of Congress
University of Michigan
Peabody Museum of Archaeology and Ethnology
Prof. Serge Elisseeff
Prof. J. K. Fairbank
Prof. Paul Linebarger
U. S. S. R.
Biblioteka SSSR imeni V.I. Lenina

附

1 東洋學術協會

會長 和田 清

評議員 石田幹之助

梅原末治

末松保和

三上次男

編輯委員

榎 一雄

田中正俊

三根谷 徹

和田 清

岩井大慧

榎 一雄

津田左右吉

山本達郎

河野六郎

本田實信

山根幸夫

岩生成一

白鳥 清

原田淑人

和田 清

關野 雄

松村 潤

山本達郎

東洋學報三九卷一號、四號內容目次

三九卷一號(昭和三十一年六月)

高麗兵馬使考

突厥初期可汗の系譜

——伊瀨仙太郎氏の反論に答ふ——

末松保和
護 雅 夫

三教搜神大全と天妃娘娘傳を中心とする媽祖傳説の考察……………李 猷 璋
W・G・アストン『日本紀』……………龜 田 隆 之

三九卷二號(昭和三十一年九月)

占城國末期の國都と貿易港について……………岩 生 成 一

清朝中期の畿輔旗地政策(一)……………石 橋 秀 雄

——特に雍正・乾隆年間の制度上にあられた旗地の崩壊防止と旗人の救済に關する政策を中心として——

オランダの東インド經營初期に於けるシャム貿易の役割……………永 積 昭

——一六三四年のバタニ遠征をめぐつて——

建州左衛の位置と滅亡の時期……………園 田 一 龜

三九卷三號(昭和三十一年十二月)

宋代の冬季失業者救護事業について……………今 堀 誠 二

南宋米市場の分析……………斯 波 義 信

清朝期中の畿輔旗地政策(二)……………石 橋 秀 雄

明初の均工夫について……………山 根 幸 夫

ブライアン・ハリスン『東南アジア小史』……………永 積 昭

九卷四號

唐代における中國語語頭鼻音の Denasalization 進行過程……………水 谷 眞 成

明代哈密王家の起原……………松村潤

チベット語接續辭 te について……………山口瑞鳳

Ratnāvadānamālā について……………岩本裕

—Ratnāmālavādāna, ed. K. Takahata を見よ—

『フェルピースト通信集』について……………矢澤利彦

サンジェフ編『ドルジⅡバンザロフ著作集』……………護雅夫

2 ハーヴァード・エンチン・グラント運営委員會

前年度に引續き、交附された資金をもつて、左記の研究および出版を助成した。

研究

「中世トルキスタン史の研究」……………松村潤

「近代中國における鄉村統治の研究」……………山根幸夫

出版

滿文老檔研究會譯註『滿文老檔』Ⅱ (前掲)

岩井大慧『日支佛教史論攷』 東洋文庫論叢第三十九 昭和三十二年五月 A五版 五五四頁 索引三二頁 英

文要旨三三頁 圖版二葉

3 近代中國研究委員會

昭和三十一年度には次の研究会をおこなつた。

四月十四日 「Tan, C.C.: *The Boxer Catastrophe*. 1955. New York) (52p)」

四月二十八日

「越南近代史の構成」

村松祐次
山本達郎

五月十九日

神田正雄氏を圍む會

和田清

六月二日

「十九世紀後半の滿洲」

衛藤藩吉

六月三十日

「左翼教條主義と右翼日和見主義」

山本達郎

七月十四日

「バーム・ダット『現代インド』を讀んで」

神田信夫

「湯志鈞『戊戌變法史論』を讀んで」

佐伯有一

「黎澍『關於中國資本主義萌芽問題的考察』歴史研究、一九五六年四期を讀んで」

小野川秀美

九月十五日

「戊戌變法と湖南省」

佐々木正哉

九月二十九日

「彭信威『中國貨幣史』を讀んで」

矢澤利彦

「Boadman, Eugene Powers: *Christian Influence upon the Ideology of the*

Taijing Rebellion を讀んで」

矢澤利彦

十月十三日

「清末財政の一問題—嘉・道間州縣の虧空について」

鈴木中正

十一月十日

「下關條約第六條第四項成立の背景について」

波多野善大

十一月二十四日

「鮑超と霆軍」

中山八郎

十二月十五日

「川沙の暴動」

市古宙三

なお、近代中國研究運營委員會の現在までの刊行書は左記の通りである。

中國文化史日本語文獻目錄（教育・キリスト教） 多賀秋五郎・矢澤利彦共編

東京大學文學部中國哲學文學研究室所藏 近代中國研究資料目錄

中國雜誌論說目錄（萬國公報・江蘇・浙江潮・湖北學生界・民報）

盛宣懷・袁世凱奏議目錄（愚齋存稿・北洋公牘類纂・同續編）

李鴻章奏議目錄（李文忠公全書）

左宗棠・張之洞・薛福成・張謇奏議目錄（左文襄公全集・張文襄公全集・庸齋全集・張季子九錄）

經世文編總目錄 第一分冊（皇朝經世文編・同補・同續編三種）

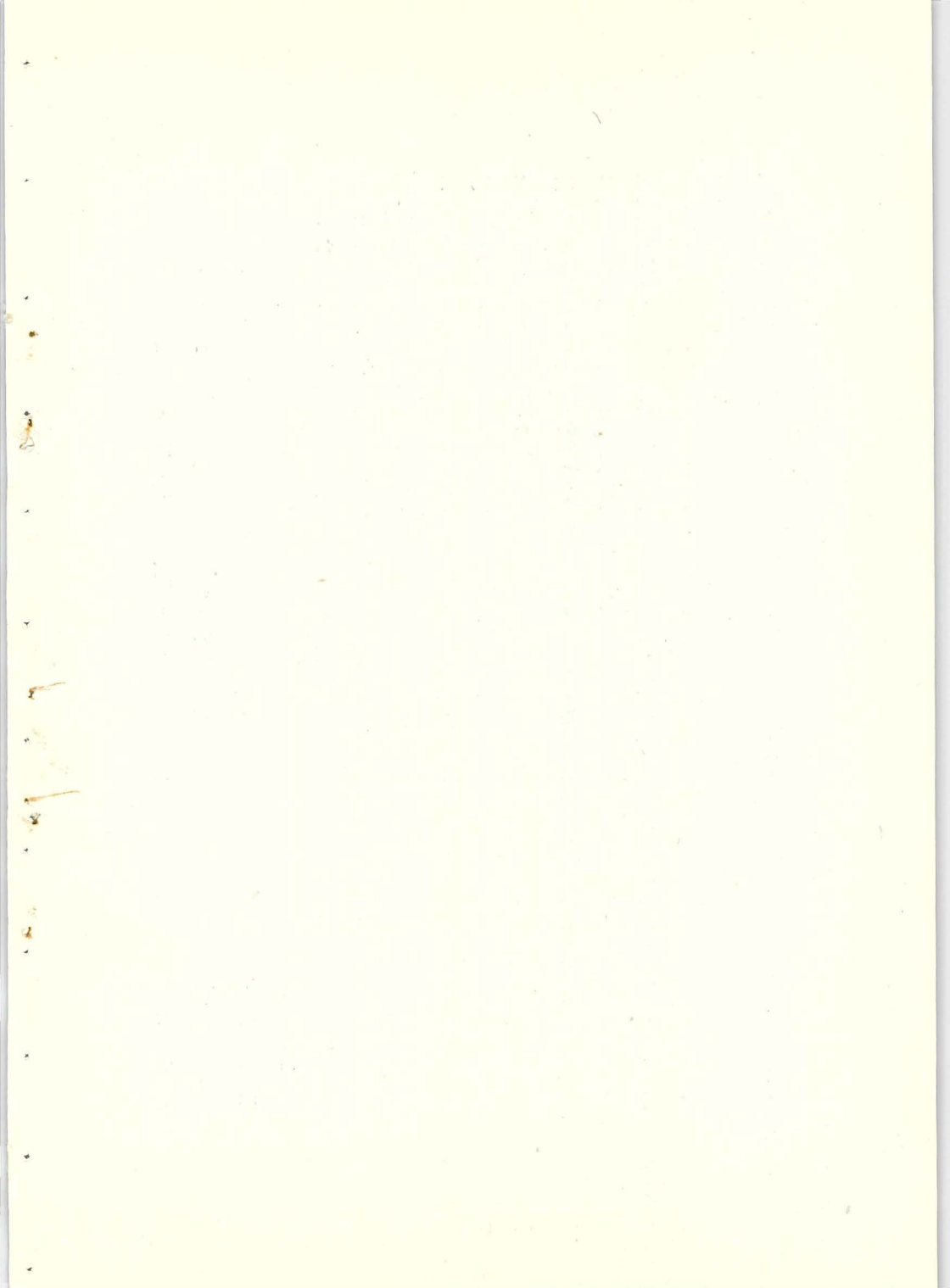
經世文編總目錄 第二分冊（皇朝經世文續編・三編・四編・五編・新編二種・新編續集・新編時務續編・經濟文

新編・畜艾文編・皇朝道咸同光奏議・民國經世文編）

經世文編索引

List of the Blue Books concerning the Far East in the Libraries of Toyo Bunko and Hitotsubashi

University. Ed. by S. Froh.



昭和三十三年十一月二十五日印刷
昭和三十三年十一月三十日發行

〔非賣品〕

財團法人東洋文庫年報

東京都文京區駒込上富士前町一四七

發行者 榎 一 雄

東京都千代田區神田猿樂町二ノ四

印刷所 株式會社新榮堂

東京都文京區駒込上富士前町一四七

發行所 財團法人 東 洋 文 庫

(振替東京六七〇二三番)

